

1. 今年度の活動概要	長谷川 喜哉	2
2. 夜回り活動	大滝 雅史	4
3. 炊き出し・相談会	中西 将人	6
4. ビッグイシュー	鶴岡 綾乃	9
5. シンポジウム	大滝 雅史	11
6. 北大祭への出店	佐藤 真愛	13
7. 今年度の調査について	世良 迪夫	14
8. 生活保護申請同伴	世良 迪夫	16
9. 会計報告	岩瀬 健治	18
10. 他団体・機関との連携	木下 武徳	19
11. 来年度に向けて	長谷川 喜哉	21
12. 私と労福会		22
北海道の労働と福祉を考える会 次期役員紹介		31

1. 今年度の活動概要

ホームレスというと「好きでこのような生活を選んでいるのだろう」「仕事をしない怠け者」「怖くて近寄りたくない」といったイメージを世間一般にはもたれることが多いのではないのでしょうか。しかし実際に話を聞いてみると、「彼らも普通の人間だ」ということに気付かされます。以前は仕事をして生活をしていたのが、ちょっとした不運な出来事が重なってしまったために路上生活を余儀なくされている場合が多いのです。そして、冬場は日々氷点下で極寒の札幌でもこのような生活を強いられている人が少なからずいます。この現状を目の当たりにし、「何かできることをしたい」という思いから発足した北海道の労働と福祉を考える会は、活動がはじまって8年半、野宿者の自立支援を目的として、「自分たちには何ができるのか」を当事者と向き合いながら考え続けてきました。そして、今年度もたくさんの方々に支えられて活動してまいりました。

今年度は、より多くの人に野宿者問題に目を向けてもらいたいという思いと、いつも野宿者と近い労福会でありたいという思いのもとで活動に取り組み、様々な新たな活動にチャレンジした一年でした。活動の詳細は各章で述べるとして、今年度新たに始めた活動や特に力を入れて行った活動として、ビッグイシューの札幌での販売サポート、シンポジウム、広報活動の3点が挙げられます。

1.1. ビッグイシューの販売サポート

ホームレスの仕事を作り自立を応援する雑誌、ビッグイシュー日本版の札幌での販売が始まりました。2007年6月の試験販売の後、9月3日より定期的な販売となりました。当会は、販売開始時のサポートや雑誌の卸作業、広報など多方面からサポートしました。4月からは、労福会からは運営を切り離し、新たに「ビッグイシューさつぽろ」という団体を立ち上げ、さらにきめ細かいサポートをしていく予定です。

1.2. シンポジウム

広くたくさんの人に野宿者問題に目を向けてもらうことを目的として、2008年2月11日に北海道大学学術交流会館でシンポジウムを行いました。講師には、日本女子大学人間社会学部教授岩田正美さん、ビッグイシュー日本代表佐野章二さんをお招きし、基調講演を頂きました。当会のスタッフにとっても、活動を見つめなおし、今後を考えるよい機会になりました。

1.3. 広報活動

北海学園大学や北星学園大学、NPO団体の講座、平成遠友夜学校などに出向き、また、北大祭に出店するなどし、札幌の野宿者の実態、当会の活動についてなどを紹介しました。多くの人に野宿者問題を知ってもらうことができ、ここから活動に参加する人が出てきた

り、寄付をいただくこともありました。また、ビッグイシューの札幌での販売が始まったことや、昨今の貧困や格差社会への関心の高まりから、今年度はメディアで野宿者問題が取り上げられる機会が多く、当会もマスコミ各社の取材に積極的に協力してきました。

3月	26～27日	函館ホームレス調査
5月	7日	北星学園大学にて労福会紹介
5月	13日	札幌市との意見交換会
5月	26日	炊き出し・総合相談会
6月	7～10日	北大祭へ出展
6月	16日	学習会開催
6月	30日	炊き出し・総合相談会
7月	7～8日	寄せ場交流会に参加
7月	21日	学習会開催
8月	4日	炊き出し・法律相談会
8月	11日	ホームレス概数調査
9月	3日	ビッグイシュー販売サポート開始
9月	16日	札幌市との意見交換会
9月	29日	炊き出し・総合相談会
10月	15日	北星学園大学にて労福会の紹介
10月	27日	NPO団体の講座で講演
10月	27日	炊き出し・総合相談会
10月	30日	平成遠友夜学校にて講演
11月	2日	北海学園大学にて労福会の紹介
11月	10日	拡大夜回り
12月	8日	炊き出し・法律相談会
12月	14日	居宅生活者に年賀状送付作業
1月	26日	ホームレス概数調査
2月	11日	シンポジウム
3月	6日	北海道との意見交換会
3月	9日	2007年度総会

4月から8月は第1・3・5金曜日に、9月からは第1・3・5土曜日に夜回りを実施

2. 夜回り活動

当会の中心的な活動の一つとして、「夜回り」があります。これは、定期的に野宿者の多くいる場所を訪ねていき、会話する機会を作るものです。

具体的には、毎月第一、第三、第五土曜日の20時に、地下鉄大通駅の改札前に集合し、札幌駅近辺、大通、狸小路など、野宿者が多く生活している場所をまわって、お話をするというものです。まわる際には、缶コーヒーなどを持っていき、野宿者に渡します。他にも、労福会を知らない野宿者と会ったときのために、労福会の紹介チラシを持って行ったり、近日中に炊き出しなどがあれば、それを告知するためのチラシも持っていきます。

まわる場所のスタッフの班分けは、当日に集合してから行いますが、基本的には毎回、同じ場所を担当してもらいます。これは、毎回同じスタッフがまわることで、一人ひとり野宿者との交流を深め、より親密な関係を築くためです。スタッフとしては、「前回、元気がなかった〇〇さんがどうしているか気になる」というような動機が生まれるために、夜回り自体が継続的にできるようになるのです。野宿者の中には、既に当会のスタッフと顔なじみになっている方が多く、こちらが夜回りで訪ねていく日を憶えて待っていてくれる方もいます。

こうした夜回りの意義はいくつかありますが、第一に、定期的に野宿者と接することで、当会のスタッフが彼らの事をより身近な存在として認識できるということが挙げられます。

特にこれまで野宿者と全く関わったことがなかったという方に、実際の野宿者の現状を知ってもらう機会にもなります。野宿者の存在は世間的に認知されていても、実際に野宿者一人ひとりがどんなことを考え、どうやって暮らしているのかといったことまでは、直に彼らと接してみないと分かりません。当会の活動に参加の制限はないので、野宿者のことについてあまり知識のない人でも、まず夜回りに来てもらうことで、野宿者の問題について知ってもらうことができます。そのため、これは同時に当会の活動を紹介する場にもなっているともいえます。

第二に、先にも述べたように、定期的に野宿者と会うことで関係が深まれば、生活保護や健康に関する相談を受けることもあります。そこから、役所や病院などへの付き添いの約束に繋がることもあるので、野宿者の相談を聞く機会づくりになっているという意義があるといえます。

また、これら以外にも、単純に野宿者の方と、世間話や趣味の話をすることを楽しめるというのも大きな要素であるといえます。

また、今年度も昨年度に引き続き、11月に拡大夜回りを一度行いました。これは、札幌の中心部以外にいる野宿者にも当会のことを知ってもらうために行われました。具体的には、札幌の野宿者が暖かい店の中で時間をつぶす傾向があることを踏まえ、札幌市内のJR・地下鉄沿線のスーパーを訪れ、店内に野宿者と思しき人がいないかどうかを探しまし

た。他にも、訪れたスーパーの店員に「店内に野宿者と思われる方が現れないか」ということを尋ねたりしました。

この拡大夜回りでは、結果としてそれぞれの班で数人の野宿者と接触することが出来ましたが、人数は少なく、大きな成功とはいえませんでした。しかし、札幌郊外においても野宿者は確実に存在しているということには変わりありません。そのため、毎回の夜回りの参加人数が安定している現在の状況とも併せて、今後、より広い範囲で毎回の夜回り活動を行うことについても協議する必要があるといえるでしょう。

その他の展望については、今後とも定期的に夜回り続けることはもちろんですが、「曜日を変更してはどうか」という意見が出ています。今年度は昨年度以前に金曜日に行っていた夜回りを土曜日に変更しましたが、それによって来づらくなっている方もいるようです。もちろん、その一方で、「土曜日の方が来やすい」という方もいるのも事実です。今後、当会でいかに活動していくかということにも関係しますので、慎重に決定すべき事項であると考えられます。

3. 炊き出し・相談会

当会では年に数回、各種団体と共催で各種相談会を兼ねた炊き出しを行っています。

炊き出しは、野宿者に限らず生活に困っている人々のための場です。来場者に少しの間だけでも暖かくくつろげる場を提供するとともに、スタッフと信頼関係を築き、自立への可能性を探る手伝いをするを目的として行われます。また、初めて活動に参加する人に当会の活動や野宿者の実態を知る良い機会にもなります。

今年度、従来と大きく異なった点は、建替えのため使用できなくなった札幌市民会館から、旧豊水小学校体育館へ会場を移したことです。このことについては後述し、まず今年度の概要を振り返ります。今年度炊き出しは計6回行われ、下表のようになっています。

表 3-1 炊き出し・相談会実施概要

日時	来場者数	同伴件数	特記事項
5月26日	59	3	共催：札幌市、ハンド・イン・ハンド 総合相談会・健康診断
6月30日	71	1	共催：札幌市、ハンド・イン・ハンド 総合相談会、健康診断の結果返却
8月4日	68	1	共催：札幌司法書士会 法律相談会
9月29日	75	0	共催：札幌市、ハンド・イン・ハンド 総合相談会・健康診断
10月27日	79	1	共催：札幌市、ハンド・イン・ハンド、パンフレンドクラブ 総合相談会、健康診断の結果返却、ビンゴ大会
12月8日	73	4	共催：札幌司法書士会 法律相談会

今年度は全体的に昨年度を上回る来場者がありました。今年度の平均は71人であるのに対し、昨年度のそれは65人となっています。10月の回の来場者は79名で、2005年5月の回の87人以降の最高数です。初回のみ来場者数が少なかったのは、会場変更に伴うものとも考えられます。

また、新しい人が多く見られました。札幌市全体の野宿者数の増加に伴うものといえるでしょう。

3.1. 食事・物資の配布

おにぎり、豚汁などの食事や、タオル・歯ブラシ・缶詰・カップ麺・石鹸・靴下・カミソリ・風呂券（北海道公衆衛生浴場協会加盟銭湯全てで利用できる回数券）・衣類などを来場者に配りました。この他に、各テーブルにチョコレートや飴などの菓子類も置きました。

食事については、ハンド・イン・ハンドの提供に依ることがほとんどでしたが、12月の回では北21条教会の台所を借り、当会スタッフがおにぎり・豚汁を調理しました。

3.2. 生活相談

会場では、夜回りよりもゆったりとした雰囲気の中で野宿者と会話することができます。当会のスタッフも、最近の調子を聞いてみたり世間話を持ちかけたりして、気軽に話ができる雰囲気がつくれるよう心がけています。このような雰囲気の中、夜回りの時にはじっくりできなかつた話を聞いたり、ちょっとした雑談が野宿者の抱えている問題の話に繋がったりします。

法律や健康に関する問題も、司法書士や医療関係者など専門的な知識を持つ方々の協力により、解決しやすい環境が着実にできてきています。

また、生活保護申請付き添いを受け付けましたが、一回の相談会で一人も希望しない回もありました。「例年に比べると相談会の場で受け付けた同伴件数は減少している」とされた昨年よりも、来場者数の増加にもかかわらずさらに減少しています。これは夜回りの場でも付き添いを受け付けていること、「なんもさサポート」を経由する申請があることなどが一因かと思われます。しかし、炊き出しが生活保護申請に繋がる重要な機会だったこと、また新メンバーが申請に初同行するよい機会だったことに鑑み、炊き出し自体に何らかの原因がないか考えていく必要があります。

3.3. 散髪

相談会の場では、ボランティアの理容師の方の協力によって来場者の散髪も行っています。毎回15名程度の散髪を行っていただいています。時間の関係で希望しても散髪できない人がでるほど好評を博しています。散髪の待ち時間や、散髪している間にも来場者と話をすることができ、コミュニケーションを深める良い機会にもなっています。

3.4. 企画

10月の炊き出しでは、来場者との交流の一環として「ビンゴ大会」を開きました。例年同様会場は盛り上がり、多くの来場者に楽しんでいただけたようです。いつもは、食事をし終わるとすぐに帰ってしまう来場者が少なからずいますが、ビンゴ大会を行った時にはそのような人も少なく、多くの人が会場に長時間滞在しており、スタッフとのコミュニケーションを深める機会を増やすこともできました。今後も、楽しい雰囲気をつくることのできるような企画を考え行っていく予定です。

3.5. 他団体との協力

5、6、9、10月の炊き出し・総合相談会はNPO法人ハンド・イン・ハンドとの共催で行われ、食事の提供や衣類の配布といった点で充実させることができました。またこれらの炊き出し・総合相談会は札幌市との共催でもあります。5、9月には、区役所職員による生活・福祉相談や、ハローワーク職員による就労相談、札幌弁護士会による法律相談、札幌こころのセンターによる精神保健相談などいつもより幅広い分野での相談が行われ、加えて健康診断（検尿・血圧測定・血液検査・X線検査）も行われました。そして、6、10月にはその健康診断の結果が配布されました。

8、12月には札幌司法書士会と共催で炊き出し・法律相談会が行われました。生活保護に関する演劇・クイズなどが行われ、野宿者と共に知識を深めることができました。

また、10月にはNPO法人パンフレンドクラブからパンの提供を受けました。

3.6. 課題

会場変更に伴い会場費・暖房費が上昇したことにより、当会単独での年明けの炊き出しが行えませんでした。しかし、夜回りでは炊き出しを望む声が数多く聞かれました。厳しい冬における炊き出しの重要性、また炊き出しの機会が野宿者の自立支援に繋がる重要な場であることに鑑み、来年度は炊き出しを行えるよう、人材面・資金面を充実させる一層の努力が求められています。

4. ビッグイシュー

4.1. 「ビッグイシュー」とは何か

ビッグイシューは、ホームレスの人々にビジネスパートナーとなっていただき、彼らが雑誌を販売し、収入を得、自立に向けた基礎を作る事業です。

雑誌販売者は、現在ホームレスか、あるいは自分の住まいを持たない人々です。住まいを得ることは単にホームレス状態から抜け出す第一歩に過ぎません。そのため、住まいを得たホームレスの人でも、必要な場合にはビッグイシューの販売を認めています。最初、販売者は、この雑誌 10 冊を無料で受け取り、その売り上げ 3000 円を元手に、以降は 140 円で仕入れ、300 円で販売し、160 円を彼らの収入とします。販売者全員が行動規範に同意し、顔写真入りの販売者番号の入った身分証明書を身につけて雑誌を販売しています。
(ビッグイシュー日本版本誌より抜粋)

4.2. 札幌でのビッグイシューの取り組み

2007 年 6 月 8 日に本格的な販売に先立ち試験販売を行いました。4 人の野宿者が BENNIE K (ベニーケー) のライブ会場前で販売しました。3 ヶ月後の 9 月 3 日には、札幌でのビッグイシュー販売が始まりました。販売者 4 人でのスタートとなり、現在では、6 人の野宿者が札幌市内 (大通駅・札幌駅周辺、琴似) で販売をしています。

ビッグイシューを販売するうえで、スタッフにはどのような仕事があるのか、まとめます。

- ・新たに販売を希望される方への詳しい説明・意思確認
- ・ID カード (身分証明書) の発行
- ・販売開始時、一緒に立っての販売サポート
- ・雑誌の卸 (さっぽろ自由学校「遊」の場所を借り毎週火・木・土曜日に行っています)

4.3. 札幌でのスタッフ

当初、当会が中心となって始めた取り組みでしたが、続けていくうちに、さまざまな経路をたどり、多くの新たな方々が参加してくださるようになりました。mixi (ミクシィ) やボラナビなどです。そこから、当会のほかの活動にも参加してくださるようになった方々もいます。北海道若者サポートステーションとの連携もさせていただいています。

4.4. 札幌での経過

2008 年 3 月 3 日で、札幌でのビッグイシューはスタートから半年を迎えました。これまでに 7 人が販売者さんとして登録され、現在では 6 人が販売をされています。大阪・東

京などでは、続けるという方が少ないなか、半年近く販売を続けておられる販売者もいます。常連客を獲得することで、一定の売り上げを保っている方もいます。

始める前から、冬をどう乗り切るのかという大きな課題がありましたが、札幌市との協力のもと、12月の暮れより地下ブースでの販売を行うことができるようになりました。現在は、ブースでの販売を希望する4人の販売者が毎日（朝7時半から夜8時までを4つに区切り、ローテーションを組んで）仕事をされています。ブースを設置してから、1人あたりの雑誌の売れ行きが伸びました。最新号だけではなくて、バックナンバーも好調のようです。安定した収入を得ることができるようになりました。また、販売者は、自分たちでポスターを作るなど、さまざまに工夫をされています。

ブースでの販売の時間ではないときには、各自の販売場所へ行っています。4人も含め、全員冬はとくに外に長時間立ってはいられず、苦勞されているようです。お客さんとなかなか会えないこともあるようです。冬対策は、これからも課題の一つとなりそうです。

4.5. 今後の展望

ビッグイシュー販売を続け、自立へ向かうとき、さらに必要となることがあります。たとえば、アパートを探すことや、日々の生活サポートです。これらはビッグイシュー基金との連携を行いながら、当会の積み重ねてきた知識と経験を存分に活かしていくことができると思います。

※ビッグイシュー基金とは

『ビッグイシュー基金』は、ビッグイシュー日本を母体として2007年9月に設立された非営利団体で、就業を含めた総合的なサポートが必要であると考えられたことがきっかけで生まれました。具体的には、生活自立応援プログラム（医療相談、依存症克服相談、住宅相談、社会福祉相談、法律相談、金銭管理等支援、若者ホームレス支援）、就業応援プログラム（キャリアカウンセリング、基礎教養トレーニング、技能・資格トレーニング、就業体験トレーニング、仕事の開拓・斡旋、就職後フォローアップ）、スポーツ文化活動応援プログラム（音楽活動サポート、ダンス活動サポート、スポーツ活動サポート、その他）です。

（ビッグイシュー基金の Web サイトより） <http://www.bigissue.or.jp/>

5. シンポジウム

当会では、今年度、野宿者問題についての一般的認知の向上、及び当会の活動を紹介する場を設けるといふ目的のもとに、初めてシンポジウムを行いました。これは、北大において、北大生の主体的な活動を支援する「北大元気プロジェクト」といふ企画の資金提供の元に行われたものです。

具体的には、2月11日に北海道大学内学術交流会館にて開催しました。基調講演では、日本女子大学教授の岩田正美氏と、ビッグイシュー日本代表である佐野章二氏にお話ししていただきました。シンポジウムは、中島岳志氏の進行で、当会メンバーが報告を行った後、全体でのディスカッションを行いました。当日の全体の流れや内容については、以下の通りです。

〈シンポジウム当日の主な流れ〉

- ・岩田正美氏（日本女子大学人間社会学部教授）

基調講演「解決しない貧困とホームレス問題のゆくえ」

- ・佐野 章二氏（(有)ビッグイシュー日本代表・CEO）

基調講演「ビジネスの手法でホームレス問題に挑戦—ビッグイシューの事例から」

- ・シンポジウム「北海道の貧困とホームレス支援のゆくえ～労福会からの発信～」

①代 表（北星学園大学社会福祉学部准教授） 木下武徳氏

②事務局長（北海道大学農学部学生） 長谷川喜哉氏

③会 員（市民ボランティア） 成田允子氏

④会 員（北海道若者サポートステーション） 松田考氏

コメンテーター：岩田正美氏 佐野章二氏

コーディネーター：中島岳志氏（北海道大学公共政策大学院准教授）

岩田氏は、調査データ等に基づき、日本国内における経済格差が生じている事を示しながら、社会との繋がりが絶たれた状態での社会関係回復の難しさ、住居保障がされない日本の野宿者における就労・自立の難しさについて話していただきました。

佐野氏は、主に大阪のビッグイシュー販売員の様子や、経営状況などを紹介しながら、社会的企業の一形態であるビッグイシュージャパンが突き当たった問題や、その展望について解説していただきました。

シンポジウムでは、四人の発表者によって一人10分ずつという短時間の中で、それぞれの立場に基づいた報告をしていただき、ディスカッションを行いました。報告のテーマはそれぞれ、①「札幌の路上生活者の特徴と現状」、②「労福会について」、③「路上生活者の健康状態について」、④「若年層の貧困の現状」となっております。討論は参加者の率直な意見の発表の場ともなり、来場して頂いた方々のみならず、当会のスタッフもそれぞ

れが「支援」や「現状」について考える良い機会となりました。

このようなシンポジウムの開催は、当会スタッフにとっても初めての経験でしたが、協力して行うことで、準備段階から当日まで、大きなミスもなく終わらせることができました。また、200人弱の方々に来ていただいたことで、当会の活動や野宿者問題の現状、ビッグイシューのことなどについて紹介するという、当初の目的も達成できたといえます。



6. 北大祭への出店

6月7日～10日に北海道大学で大学祭が行われました。昨年度、当会では焼きおにぎり屋を出店し、店頭で労福会の紹介をしたビラを置いてみたところ、思いのほか大きな反響を得ることができました。そこで、今年度は展示を工夫することに重点を置き、ホットドッグ屋として出店しました。

昨年度と大きく異なる点は、多くの模擬店がある中で2団体しか認められない「特別推奨企画」に選ばれた点です。これによって、大学祭当日に配布されるパンフレットへの掲示、スタンプラリーのスタンプ通過ポイント、放送による宣伝など、実行委員会から宣伝面でのバックアップを受けることができました。展示については、文字ばかりを書き連ねるのではなく、グラフを用いたり、Q&A方式にするなど、来場者にもわかりやすいものを作りました。他にも、当会の普段の活動内容、野宿者問題に関する新聞記事を掲示しました。

大学祭当日、当会の会員、野宿者など、たくさんの方にお手伝いいただきました。また、立地条件の悪さにも関わらず、大勢のOBの方や興味を持ってくださる方々にお越し頂きました。あまり野宿者問題に関心のない方も、スタンプラリーでスタンプを押しに当店に足を運んで下さった際、展示物を見て、私たちに質問して下さることもありました。

今年度の反省点としては、立地条件が悪く経費も掛かりすぎたため、黒字を出すことができなかったことです。しかし、今年度は昨年度の反省も踏まえて、よりしっかりとした展示作りもしましたし、また、その作業をするにあたって、学生間での絆を強めることができました。そしてなにより、来場者の方に野宿者問題について知っていただけたことで、当会としての北大祭出店意義が達成されたといえます。

7. 今年度の調査について

野宿者の実態を知ることは、よりよい自立支援活動を行う上で重要なことです。今年度、当会は野宿者の人数確認調査を夏と冬の2回行いました。この調査は、札幌市のどの場所にどの程度の人数が路上で生活しているのかを把握するためのものです。普段の夜回りでは札幌中心部しかまわれませんが、まわる人数が多い人数確認調査では郊外にいる野宿者の様子も知ることができます。毎年少なくとも1回は行っている人数確認調査ですが、毎回調査時期が異なることがあるため、他年度と比較を行いやすいよう調査時期を増やして実施しました。調査結果は下図のとおりです。

7.1 調査概要

これまで行ってきた調査の結果や夜回りなどの活動で集めた情報をふまえて、調査範囲を札幌駅周辺、大通・狸小路付近、豊平川河川敷、市内主要公園、地下鉄沿線など9方面に分けて調査を実施しました。調査開始時間は、野宿者がまだ寝ていて移動を始める前の早朝4時頃としました。調査は、スタッフが2人1組になり担当場所をまわり、目視で性別・年齢等を確認していきました。

夏季（8月11日）は当会独自に調査を行い、冬季（1月26日）は昨年度に引き続き厚生労働省から委託された「ホームレスの実態に関する全国調査」の一環として実施しました。

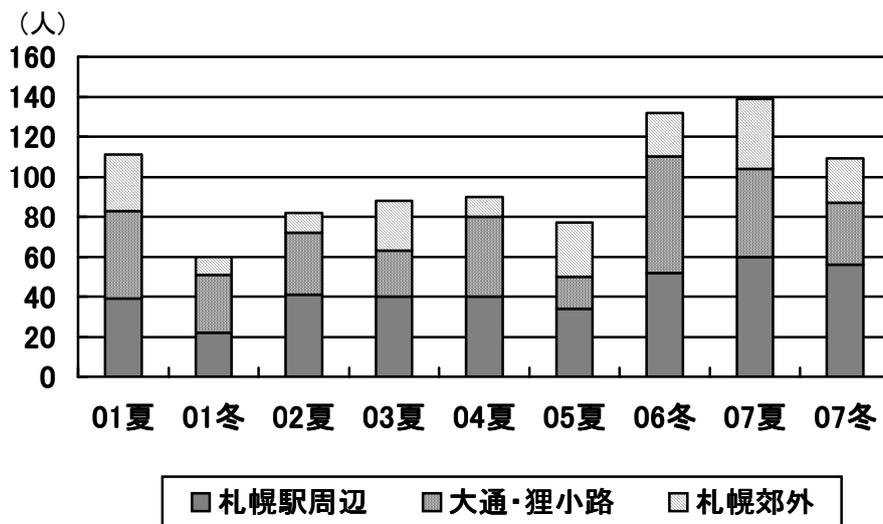


図7-1 ホームレス概数調査結果

7.2 調査結果から

調査結果からわかることは、相変わらず札幌には100人以上の野宿者がいるということです。当会の支援活動を通じて路上生活から脱した方は多くいますが、また新たに野宿者になってしまう人や、路上生活から脱しても再び野宿者になってしまう人が少なからずいるからだと考えられます。

今年度の冬季は夏季と比べて人数が減っています。これは冬に路上で寝泊りする人は少ないということと、調査当日は猛吹雪という悪天候だったということ、さらに事前調査が不足していて野宿者の動向が十分予測できていなかったということが影響していると思われます。

野宿者は普段人の目につかないところに居ることが多く、探し出すだけでも困難です。また、見かけだけでは野宿者とはわからない場合もあり、目視による調査では限界があります。よって実際には調査結果よりも多くの野宿者がいると考えられます。より正確な調査結果を得られるよう、事前に野宿者のいる場所についてさらに情報を集めていくことが今後の課題です。

8. 生活保護申請同伴

野宿生活を抜け出す方法のひとつとして、生活保護の申請が挙げられます。住所不定で身寄りも無く、そのためなかなか仕事にも就けない。生活保護はそんな辛い生活から抜け出したいときの助けとなります。しかし、実際には、区役所に一人だけで足を運ぶのを躊躇したり、生活保護制度についてよく知らなかったりする人が少なくありません。当会では、そのような方々に生活保護についての説明を行っています。そして、もし生活保護を希望するようであれば、「生活保護申請同伴」という形で当会のスタッフが付き添い、行政窓口へ申請の相談に行っています。同伴活動は、脱野宿をするための第一歩を踏み出そうとしている野宿者の不安や悩み、心細さなどをサポートすることを目的としています。

現在、生活保護を受ける際に「定まった住まい」がなければ、申請を認められるのはたいへん難しい状況にあります。札幌で住まいのない野宿者が生活保護を受けるためには、主に5つの方法があります。

- (1) 救護施設での一時的な保護を受け、救護施設を居住地として申請を行う方法
- (2) 就労支援施設（明啓院など）での就労支援を受ける方法
- (3) 「なんもさサポート」（生活に困っている人の住居や就職を支援する事業）の支援を受ける方法
- (4) 保証人や前金がなくとも借りられるアパートを自ら探す方法
- (5) 病院に入院し、病院を一時的な居住地として申請を行う方法
（健康上の問題がある場合）

今年度の生活保護申請同伴の結果は表の通りとなりました。当会となんもさサポートとの連携が深まってきたことで、今年度はなんもさサポートによる支援を受けた野宿者が非常に多いという結果になりました。反対に、救護施設に入るのが例年に比べて難しくなっているという背景もあります。

同伴活動を行っていく上で、課題もいくつか挙げられます。まず、同伴を請け負うスタッフの偏りです。大勢で行う夜回りや炊き出しと異なり、同伴では個々のスタッフに大きな負担がかかります。今のところ対応しきれないという事態にはなっていませんが、今後継続して同伴活動を行うためには、できるだけ負担を分散して請け負っていかねばなりません。また、同伴の記録が十分なされていないことも今後の課題です。同伴の詳細について記録されず、担当したスタッフしか把握していないことが、少なからずありました。同伴の方法を見直したり、野宿者の状況を把握したりするためにも、今後できるだけ記録を徹底していく必要があります。

生活保護を受けたからといって、それだけで十分に自立した生活を送ることが出来るというわけではありません。生活保護を打ち切られて、再び野宿者になってしまう人もいます。生活保護を受けたあと当会として他にもどのようなサポートができるのか、今後具体的に話し合っていきたいと考えています。当会の目的は生活保護申請をすることではなく、あくまで自立を支援することだからです。

表 8-1 生活保護申請同伴 結果

	救護施設	就労支援	就職	サポート なんもさ	アパート	病院	不受理	合計
2005 年度	22 人	11 人	0 人	7 人	11 人	2 人	5 人	58 人
2006 年度	8 人	7 人	3 人	7 人	6 人	0 人	0 人	31 人
2007 年度	5 人	6 人	0 人	27 人	2 人	1 人	2 人	43 人

9. 會計報告

省略

10. 他団体・機関との連携

2007年度、当会の活動として、ますます他の団体との連携やネットワークが大事になってきました。より正確に言えば、当会の活動の多くが、他の団体との連携の上に成り立っていることが、はっきりしてきました。2007年の(1)5月・6月、9月・10月の炊き出しは札幌市とNPO法人ハンド・イン・ハンド、(2)8月・12月の炊き出しは札幌司法書士会、(3)2008年の1月概数調査は厚労省事業の札幌市からの委託で、(4)2月のシンポジウムの開催は北大元気プロジェクトの活動費助成によるものです。

特に、炊き出しについては、札幌中心部の市民会館が使えなくなったことから、小学校の体育館を借りて実施することになりました。しかし、会場費や設営費だけで多額の資金が必要になり、資金力の脆弱な当会だけの単独では開催が難しくなったことも連携を進めていかなければならない1つの要因になっていると言えます。しかし、当会を通して他団体も野宿者支援に関心を持って活動に加わってもらえることは、当会の活動の幅を広げていくうえで重要な役割として捉えてもよいでしょう。

また、2007年秋の大きな活動の展開として、『ビッグイシュー』の販売支援を開始したことにより、ビッグイシュー日本と、雑誌の卸場所として札幌自由学校「遊」と協働することになりました。これも今まで関わりのなかった団体と協働して事業をする最近の当会の活動の傾向をよく表している活動形態でもあります。ただ、現在ビッグイシューの販売については、組織的な対応を強化するために、当会とは別の団体を立ち上げていくことが議論されています。たとえ、そのようになったとしても、北海道・札幌において、野宿者支援をしていく団体同士、連携を進めていく必要があることは言うまでもありません。

さらに、上記以外の活動として、3月およびその他随時、札幌市との意見交換会を持ち、札幌市のホームレス施策に対して協議・話し合いを行いました。他方、2007年度は、北海道や北海道ホームレス支援ネットワークについては、あまり動きはありませんでした。2007年7月に大阪で開催された全国寄せ場交流会には有志で参加し、大阪等の団体の支援活動について学んだり、広島大学の佐々木宏先生の学生達と交流をしたり、日本一大きな寄せ場である大阪・釜ヶ崎の見学をしたりと、実り多い研修の機会となりました。これら他団体との交流は、当会の活動にとっても大きな刺激となったと感じています。

そして、日ごろの活動のなかでは、野宿者の家の提供等を積極的に展開している「なんもさサポート」とのつながりが強くなってきています。病気になったり、生活保護の申請の際に家を見つけるのに、最近では真っ先に、なんもさサポートの方で対応していただけることが多いです。また、当会の居宅支援活動がなかなかできていない状況のなかで、昨年開店したなんもさサポートの「あそびば」は利用しやすい拠点になるように思われます。当会の居宅支援における今後の連携の在り方を考えていくうえで、またなんもさサポートと話し合いをしながら、考えていけたらよいのではないかと思います。

最後に、連携というわけではありませんが、赤い羽根共同募金、札幌市地域福祉振興助

成金、北星学園大学スミスミッションセンター・その他の団体等から寄付金や物資をいただきました。また、2007年度は北大元気プロジェクトからの助成金を得て、2008年2月に大きなシンポジウムを開催することができました。

当会は様々な団体に、理解され、支えられていることを忘れないようにしなければならないし、それを踏まえて、他団体との連携を推進していくことが、当会の活動を活性化し、広く野宿者問題に対する社会の面としての対応を促進する一つの方法でもあります。他方、それができるだけの当会の組織的な力量を高める必要もあるということでもあります。他団体との連携を大事にしつつ、当会の結束も高めていかなければなりません。

11. 来年度に向けて

北海道の労働と福祉を考える会が発足して8年半がたちます。学生主体の団体という特徴から、毎年運営するメンバーは変わるため、設立当時を知るメンバーはほぼいなくなりました。そのような状況の中は、先輩方が始めた活動を単にまねしているだけで、それぞれの活動の意義、目的などを考えることが少なかったように感じます。いかに効率的に夜回りや炊き出しを行うかということにばかり頭がいて、野宿者の声に耳を傾けていないのではないかと厳しい意見をいただいたこともありました。来年度はこのようなことを考える機会を多く持っていきたいと思います。また、行政や他の支援団体との連携が進んだこともあり、野宿者への支援は多方面から行えるようになりました。今後もさらに他団体や行政と密な関係を築き上げていくことは必要といえます。しかし、脱野宿された人への支援は、毎年課題に挙げられているにもかかわらず、今年度も満足に行うことができませんでした。再び路上生活に戻ってくる方が少なからずいることを考えると、やはり必要な活動であるといえます。自分が関わった人に月に1回電話をかけてみるといった小さなことから始めて、当会としてどのようなことができるのか、さらに深く考えていかねばならないでしょう。

「来年度に向けて」ということで、今年度ビッグイシューの販売を札幌で始めるのに当会が関わったり、大掛かりなシンポジウムを開催したように、どんどん新しいことにチャレンジしていくことを来年度の事務局に期待します。当会の野宿者への自立支援活動の根本にあるのは、極寒の札幌で路上で生活している人がいることがあってはならない、そして自分たちに何かできることをしたいという思いです。野宿者に寄り添い、彼らの話に耳を傾け、彼らをよく知ろうとする努力する姿勢を保ちながら、「自分たちに何ができるのか」、「どのような活動が必要なのか」を考え、悩みながら今後も地道に活動を続けていきます。

12. 私と労福会

岩瀬 健治（北星学園大学社会福祉学部）

「あー、暇だ」大学4年時、就職活動も終え卒論もまだ本腰に入っていない時期、私は時間を持て余していました。バイトも夜だけ週3回程度、授業も4年時なのであまりなく、彼女もいなかったのが暇でした。彼女と別れたばかりでした。そこで前々からちょこちょこボランティアに行っていたので、また新しいボランティアをやりたいと考えていました。その時、私は友達がホームレス支援のボランティアをしているという事を知りました。一度、とりあえず行ってみようと思い、私と労福会の関係が始まりました。

1カ月、2カ月と時間が過ぎ、隔週の夜回りや炊き出しを経験したが積極的な性格ではない私には何も分からなく、何も学んでいない状態でした。「そろそろ潮時かな」と考えていたある日の夜回り。夜回りの最中、ホームレスのおじさん達が「今日は遅かったね」「待っていたよ」「いつもありがとう」と笑顔で言ってくれました。正直、すごく嬉しかった。知識もなく何の支援も出来ない自分を必要とってくれる人がいると思うとすごく嬉しかったです。

それからは労福会の活動が楽しくなってきました。支援をするため生活保護・ホームレス関係の書籍を読むようにもなりました。卒論も急遽、進めていたテーマをやめ、ホームレスをテーマとする卒論としました。

最近、私はおじさんへの支援の方法・労福会の事・なんもさサポート等他団体の事が少しではあるが分かってきました。しかし、あと1カ月ほどで卒業迎え、就職先である静岡へ向かいます。本当にもっともっと労福会に関わっていきたい気持ちでいっぱいです。もっともっと早く労福会に関わりたかったです。就職したら北海道に戻ることは正直難しく労福会の人達に会うことも難しくなります。でも、私は労福会で出会った人達・ホームレスのおじさんの事を生涯忘れない。静岡に行ってもホームレス支援団体に入りたいと思っています。

本当に労福会の方々にはお世話になりっぱなしで、未熟な私を温かく受け入れてくれて、温かい指導があり、そのおかげで温かいぬくぬくとした気持ちで静岡に旅立ってます。本当にお世話になりました。ありがとうございました。

『若人讃』 小笠原 淳（フリーライター）

思い立った時に炊き出しその他に顔を出したりメーリングリストを垣間見たりする程度で、ろくにお手伝いもできず面目ないことです。

若人の皆さんがどんどん頼もしくなってゆくさまを、同義反覆になりますが頼もしく拝見しております。元若人のメンバーもぐっと増えて、もちろんその活躍も頼もしく感じています。もう7年ぐらい労福会の周りをうろちょろしていることにはなりますが、本年度はとくに「すげえなあ」と思うことが多かった1年間でした。具体的なあんなことやこんなことは頼もしい皆さんが報告なさるでしょうから、頼りない私は「すげえなあ」という魂の叫びに留めておきます。

路上予備軍の私も、本年の雪融けあたりから喰うための仕事を減らし、またやりたいことをやってゆく暮らしを再開したいなあ、と目論んでいるところです。畢竟、周辺うろちょろの頻度が増えてゆくことになると思いますが、若人や元若人の皆さんには寛容の心で適当にあしらって戴きたく、懲りずによろしく願います。最初に路上の記事を書いた際、当時から頼もしかったスワさんに「主観入り過ぎなんですけど」と駄目出しを喰らって泣いた私も、おじさんたちに「くよくよするな」と慰められて少し強くなりました。あの時の涙を思い出し、初心に還って頑張りたいと思っています。

若人の皆さんには、この春、北海道を離れる方も多くおられましょう。私が言う柄でもありませんが、労福会で培ったいろいろな力をいろいろな形で発揮して、いろいろなところで頑張ってください。元若人の皆さんは、相変わらず北海道で、残り少ない力を使い切らないよう気をつけながら頑張ってください。

追記。間もなく40歳の私にも、やっとな彼女ができそうな兆しが見えて参りました。ナンブさん、テラシマさん、諦めないで強く生きてください。

大滝 雅史（北海道大学文学部）

労福会の活動は、一般的には「ボランティア活動」として理解されるのだろうと思う。こうした活動は、たまに一部の人々によって「偽善的」と考えられがちである。しかし、そうした考えは、おそらく「ボランティア」を行う人々に対する誤解によるものであると思われる。「ボランティア活動をしている人間は、独りよがりの活動によって、相手に善意を押し付けている」といった誤解。

確かに、自らの「ボランティア」に絶対の善を信じているような人も、中にはいるかもしれない。私も、そういう人はあまり好きではないというのが正直な感想である。「善くあろう」とすればするほど、人間は矛盾と葛藤を抱え込まざるを得ないからである。

労福会の活動は、ホームレスと関わり、彼らの自立を支援するというところにある。

しかし、それが自分の中でいかなる意味を持つのか、半年間活動に参加しても、結局、結論を出すことが出来なかった。「自立」や「支援」に関して、そもそもそんなことが出来ているのか、何故そんなことをしなければいけないのかと、懐疑的になることもあった。いや、今でも思うことはある。

しかし、それでも私は毎回の夜回りに参加する。彼らホームレスの人々と会って「元気になってますか」といった会話をする。それは、「自立」といった目的とは直接結びつくものではないかもしれない。しかし、そうした会話の中で、ろうそくに火を灯すように、お互いの心の中に何か暖かい感情が生まれる瞬間がある気がする。気のせいかもしれないが、そう感じる。私たちの活動が、彼らに何らかの形で受け入れられる限り、労福会は続いていくだろうし、そのための努力を尽くそうと思う。多くの矛盾と葛藤を内に抱えながら。

小倉 菜穂子（市民ボランティア）

ここ3年ばかり前から、地域（西区）の人から、ホームレス支援について、何かできないだろうかと声をかけられていました。私自身、そのこと自体は大切だと思いながら、札幌ではどこで誰がどんな活動をされているのか必死で調べようということもなく過ごしてきました。しかし、中島先生のお話の中から労福会を知って、参加させていただくことになりました。

私は、まだ、皆さんときちんとした面識もなく、活動という活動もできずにいて、こうして原稿を送らせていただくのも恥ずかしいのですが、これから細く長く参加できればと思っています。また、会の今後の活動の方向性についてもたくさんの皆さんの考えを伺ってみたいと思っていますのでぜひよろしくお願いします。

まずは、ホームレスの人に会う機会を増やしたいと思っています。よろしくお付き合いください。

今 加菜実（北星学園大学社会福祉学部）

私にとっての労福会は、今や一言では言い表せない存在になりました。出会いの場であり、学びの場であり、癒しの場であり、葛藤の場でもあるからです。この会に出会えた事、参加できた事は私の人生にとってとても大きなものになりました。

今年度一年間、私は事務局次長として事務局メンバーとなり活動してきました。大学1年生のときから、炊き出しには顔を出したりしていましたが、人見知りな性格という事もあり、それまではなかなか一步を踏み出せずに・参加できずにいました。そんな私が事務局メンバー入りとは、以前の私では全く想像出来なかった事態であり、正直誘って頂いた

ときも「何もわからない私に何が出来るのか」とても不安でした。今まで労福会を長年支えてきた先輩方が大勢いなくなってしまう年でもあったので、今年度どのような労福会を作っているのか、全くビジョンが持てず、長谷川さんとは始めの頃は「とりあえず潰さないように…」と言い合って今までの活動を引き継ぎながら活動し始めました。今ではそんな始まりの時期も懐かしく感じます。初めは不安ばかり先行していたものの、夜回り、炊き出しへの参加頻度の増加によっておじさん達にも顔と名前を覚えて頂き、いろんなお話を聞かせて頂けるようになりました。夏の寄せ場交流会への参加では、同じ日本とは思えない大阪を見て、人として生きる生活がこれ程までに叶わない社会であることを実感し、現状の深刻さとそれに向き合っていかなければならないという思いを抱きました。周囲への視点の変化も活動を通して生じるようになり…、普通の生活がとても恵まれている事、家がある幸せにとても感謝する事ができるようになりました。

私はこの一年、自分自身の内的な成長と学びをしようと決意して過ごしてきました。人と繋がりながら、互いに支え合いながら生きていける事、そう思い合える環境・メンバーに出会えた事が今の私の大きな財産です。おじさん達と話す時間は、私にとってとても大切な時間です。本音で話し合ったり、向き合いながら話す相手というのはそうそういるものではありませんから。自分の意見の主張や論議という事は、労福会に入ってからするようになり(私の学校はそういう場がゼミでもないで…)、大学生の時にこの会に出会えて、良かったなと本当に思います。

現在の労福会の活動は、今までもそうであったかもしれませんが、改めて議論すべき時にきていると感じています。今年度は様々な団体、メディアとも繋がることができ、良い意味で幅を広げる事ができたと思います。今後は炊き出しを行うにしても他団体との共催が必要になってきます(費用的限界でも)。せっかく縁に恵まれたのですから、今後学生主体の「ボランティア組織」としての限界も考慮しながら、私達がよりまっすぐにおじさん達と向き合うことが出来、自立へのサポートをスムーズに行う事ができるようなネットワークを作るべきではと個人的には考えています。それぞれの限界はありますが、出来る所で組み合わせる事ができれば、様々な人達と繋がり、考え合いながら、フィールドに出て現状から始まる支援を行う団体としての良さを生かした向き合い方が出来るのではと思います。

私と労福会という事で、書きたい事を書かせて頂きました。今の私の正直な思いです。自分の活動を振り返り、客観的に見るにはもう少し時間をかけて向き合っていきたいと思っています。とりあえず、もう一年あるので今年度の反省を生かしながら、来年度も皆で論議しながら、おじさん達と向き合いながら出来る事をしていきたいと考えています。

皆様、一年間お疲れ様でした。来年度もまた一緒に、よろしくお願ひします。

佐藤 真愛（北海道大学水産学部）

私が労福会に関わるようになってから1年半。現在はキャンパス移行のため、函館からメーリングリストを見て、会の活動を見守っています。

初めは友人に誘われ、何気なく入ったサークル。何か人の役に立ちたいとか、社会に貢献したいとか、そのような考えは一切ないのに、なぜかいつも足を運んでいました。会の活動に深く関われば関わるほど、普段の生活では得ることのできないような体験をさせてもらいました。特に、私の人生において忘れることのできない経験となったのが、7月に大阪で行われた「第24回全国地域・寄せ場交流会」への参加。大阪の現状を目の当たりにして、正直言うと、目を背けたくなるような場面が何度もありました。言い方が悪いかもしれませんが、自分が如何に綺麗なものしか見てきていなかったのかということの思い知らされました。うまく文章にはできないけれど、自分の未熟さを知り、本当にいろいろなことを十分に考えさせられる視察でした。

労福会の活動を通して、私の大きな財産となったものは仲間です。遊びのサークルではないだけに、いつも何らかの問題が生じ、それを一緒に乗り越えてきたからこそその強い信頼関係があったと思います。短い間でしたが、そんな仲間を得られたことがなにより嬉しいです。これからも労福会の活動を陰ながら応援しています。今までありがとうございました。

椎名結実（市民ボランティア）

4年ぶりに労福会に顔を出しました。あれからメンバーも、会場も、抱える課題も、行政や他団体との関わり方も変わり、労福会は着実に発展していることがよく分かります！久しぶりに活動のほんの一端ですが関わらせてもらいました。関わり方も前とは少し違うけれど、4年前とはまた違った視点で労福会を見ている自分自身に、どこか違和感を覚えていました。そんな中で、今年、労福会をきっかけに新しく知り合うことのできた人たちがいることを、何より嬉しく思います。

人も少しずつ変わり、会も年月を経て少しずつ変わっていくなんて、考えてみれば当たり前のことなのに、実際、久しぶりに参加するまでそんな風に考えてもいなかったことに気づきました。当たり前のようにならないものがそこにあるような気がしていました。

でも普通のこととして、毎日、色々なことがそれぞれの人生に起きて、自分自身も変わっていく。同じものを見ても、別の考えを持つようになっていく。会もまた、そういう人が集まって作っているのだから、変わっていった当たり前。

ただ、そんな人生のそれぞれの段階で、その時なりの一生懸命さでおじさんたちに関わっていくということは、変わらない労福のスタンスであってほしいと勝手ながら思っています。そういう意味ではきっと労福会には「卒業」ってなくて、いつまでも自分なりに、

関わったおじさん・おばさんへのぴったりの返答を、探し続けているんだと思いたい。たとえば私が初めて見た早朝のバスターミナルで、所狭しと眠るおじさんたちの光景にぞっとした記憶がいつまでも消えないみたいに、諦めきれない何か、生きていることの意味みたいなものを、探し続けているのではないかと思うのです。

世良 迪夫（北海道大学工学部）

労福に居座って早4年、思えばいろいろなことがありました（が、ここでは特に触れませんが）。個人的にはとても居心地がいいせいなのか、学生としてはずいぶんと長いことやっているような気がします。

長いこといる以外で、労福における僕の役目としてたぶん一番大きいのがパソコンを扱うのが普通の人よりは多少得意だということ。とはいえ、紙媒体の編集など普段やっていることとあまり関係ない作業はさして得意ではないのです。それでも中途半端にその辺の勉強をしているせいで、わりとよくこちらに仕事が回ってきます。半分ぐらいは好きでやっているのですが、自分はいいいのですが、そろそろこのポジションを誰かに明け渡したいところですね。

でも、ささいな裏方の作業なら誰でも出来るのであまり心配はしていません。それよりも今は裏方どころかメインで活動できる人の数が少なすぎるのが悩みどころです。人が少ないだけなら毎年言われていることで、この時期はいつも同じなのかもしれません。ただ、労福会に求められていること、やりたいこと、しなければならぬことは段々と膨れ上がっているのです。幸いにも、会に賛同してくれる人は着実に増えていて、炊き出しや調査など人がたくさん必要な場には昔よりもずっと多くの人が集まるようになりました。でもだからこそなおさら、スタッフの中心となって動けるメンバーがもっと必要なのです。

困りましたね。

中西 将人（北海道大学法科大学院）

8月の炊き出しで初めて労福会の活動に参加してから、半年以上が経ちました。重要な役割を果たしてきた北大水産学部の方々が入れ替わるように函館に旅立たれた、その穴を少しでも埋めることができるよう活動してきたつもりです。新参者でありながら、後半の炊き出し、拡大夜回り、人数調査において担当者という重要な立場を任せさせていただいたこと、感謝しています。ご協力いただいた皆様に心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

全ての場面で率直に発言してきましたが、不安感・不快感を抱かれた方がいらっしやる

ことは承知しております。ご批判は真摯に受け止めてまいります。

そして「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」(ローマ 12:15) との言葉に従い、「変化を求め、信じて語る言葉に空虚なものなどない」(バラク・オバマ) と確信して、これからも努力します。

「自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです』」(ルカ 17:10) と言えるように。

『労福会と私』 成田 允子 (市民ボランティア)

ホームレス状態に陥った人について、「仕事をしたくないからでしょう」「自業自得でしょう」「若い頃に働けなかったからでしょう」「好きでやっているのでしょうか」…等々本人の自己責任だと思われがちです。

しかし実際は、多くの場合、景気動向や年齢など自分ではどうにもならない事情からホームレス状態に追い込まれてしまっているというのが実情です。

彼らは、社会的な居場所をなくした自分自身に負い目を感じ、社会復帰することを諦めている場合が多々あります。一度路上生活を始めた人たちは、なかなかその生活から脱却することができず、孤独や淋しさを感じ、社会に対して疎外感を抱いています。

私が教えられたのは「衣食足りて礼節を知る」ですが、「衣食足りて精神が荒廃する」この時代に、ホームレスの人たちに思いをはせることは、人間としての生き方に大きな影響を及ぼすことだと考えます。

地域住民がホームレスのシェルター施設建設に反対するということやホームレスに対するデマなど人権侵害も発生していますが、それは、彼らとの人間的なふれあいの欠如からくる偏見の結果であると思われまます。

実際に「何をされるかわからない」と戦々恐々として生きているのはホームレスのほうです。事実、ホームレスが地域で殺人など大きな事件をおこしたことは聞いたことはありませんが逆に、襲撃にあたりして殺されているのはホームレスの方です。

ホームレスと地域住民との共存のための出発点は、お互いが人間としての尊厳を認めること、そして行政を動かしつつ協調していくことではないでしょうか。そのためにもホームレスとふれあい、人間として理解していくことが大切だと思います。

それは、わたし達労福会などが彼らの窮状と、彼らも同じ人間だということを多くの人に伝えて行くことが大切だと思います。

彼らに対する援助が甘やかしだと批判する人もいますが、彼らが懸命に生きようとしている限り、わたし達はそれに応えるべきだと思います。

わたし達労福会の役割は、彼らの理解者であり支援者でもあり、なにより彼らの心の支えになっているという大きな意味があると考えています。

長谷川 喜哉（北海道大学農学部）

事務局長としての1年間が終わろうとしています。労福会の運営のためにこの1年間は何かと忙しく、目の前にあるものだけをこなしていく日々の連続だったように思います。まわりの人からいろいろ言われ、目の前にあるやらなければならない膨大な仕事を見たときに、すべてを投げ出してしまおうかと思ったときもありましたが、いつもみなさんから支えられ、何とかやりぬくことができました。頼んだ仕事を快く引き受けてくれたり、イライラしているときにうんうんうなずきながら愚痴を聞いてくれたり、的確なアドバイスをくれたり、持ち上げて気分を良くさせてくれたり、そんなみなさんのおかげです。今は、疲労感こそありますが、達成感と満足感、そして感謝の気持ちでいっぱいです。

今年もいろいろな人と出会いました。いっしょに区役所に行って、申請が通ったとき「お前は俺の息子みたいなものだ」と言ってきたおじさん。電話で呼び出されていつも世話になったお礼にとカップラーメンをくれるおじさん。ちょっといやらしい話で盛り上がったりもするビッグイシューの販売員のみなさん。労福会の活動のことで意見をぶつけ合うこともあるけれど、今年一年いっしょに労福会を支えてきた学生スタッフのみなさん。労福会の活動以外にもさまざまな相談にのってくださった人生の諸先輩方。その他たくさんの方々。出会ったすべての人が宝物です。

そんなこんなで、頼りない男でしたが、1年間ありがとうございました。来年度も地道にがんばっていきましょうと思います！今後ともよろしくお願いします！！

眞鍋 千賀子（市民ボランティア）

思い越せば、エルムの里公園で、椎名先生と会ったのが、私と労福会の始まりでした。

この間、私のしていた一人炊き出しは、みなずき会に発展し、又高柳春香さん、南部さんと仙台夜回りで学んでから、すぐ労福会で篠原睦さんと夜回りを始めました。

この夜回りは定着し、多くのおじさんの話を私は聞きました。

かつて生活保護申請のあとのフォローアップ活動の実行を望んでいた私は、今は、なんもさサポートの手伝いをして、もっと積極的におじさんと関わるようになっていきます。最近、極寒の寒さが札幌に始まった時期の夜回りで出会ったSさん（69才）が印象に残ります。あと一週間経てば、労福会の炊き出しを「豊水」ですという前の土曜日の夜回りでした。

私を大高さんと声かけをしたおじさんは、大層喜んで、私は楽しい出会いを体験しました。へこんでなく、自立心旺盛な話し振りは頼もしいでした。

あと一週間だから、と私は69才のおじいさんを寒さの中に置いて帰って来ました。彼は所持金も多少あったから。しかし戻ってなんもさサポートで、中塚さんから、すぐ駅に探しに行ってこい、高齢だ、と注意され札幌駅を探して歩きましたが中々みつきりません。

三晩で顔つきが変わってしまったおじいさんを、待ち合いのベンチに見つけて、Sさんですかと聞いた時は、おそろおそろでしたがSさんのホッとした表情と「オッ」と返された声が耳に残っています。Sさんは北幌荘という無料のアパートを経て、今は自立支援なんもさサポートのアパートに入居して、現在は私が何回か訪問する機会があります。彼は、もと建設現場労働者でした。野丁場とって、現場から現場へ移動して外で報酬をもらい、高い棟梁で"てっぼう"というとても男らしい仕事の話を楽しみに話し、黒沢明監督の映画のファンだったことも知り「椿三十郎」も一緒に見ました。Sさんは、身体は弱って来て助けが必要になっていますが、精神は若々しく自立心が旺盛です。

現場労働者が高齢化して、社会に援助するシステムが無くホームレスになる人は何人もいます。又借金をもってホームレスをして、いま少しずつこの金銭問題を解決しながらアパートに入居しているおじいさんと私が話をしています。このようなおじいさんに会って話を聞く度に、椎名先生がどうして会の名前を労働と福祉となくしたのかと考えさせられます。六十才以上のおじいさんは、まだまだ働きたいと言いますが、現場から容赦なく下ろされると聞きます。建設現場は壊されて来ていて、労働力を吸収できません。

ホームレス予備軍の誕生です。『会の名称を労働と福祉を考える会と欲ばったのは、国民の実態の基調にあるのは労働問題、単に福祉ボランティア組織と決めつけたくなかった』と話された椎名先生の文章を見ますと、実際の支援活動のなかでも、失業・不安定就労の問題・労災・職業病・社会保険の問題を野宿者から語られた先生だったと感慨ひとしおです。

私は労福会に参加して、私の活動をずいぶん刺激されたと思っています。もう始めてから九年がたとうとしています。学生は卒業就職など世代交代していきますが、その精神を私は学んで今おじいさんの相談、手助けをする毎日です。

北海道の労働と福祉を考える会 次期役員紹介

顧問	杉村 宏	(法政大学現代福祉学部教授)
代表	木下 武徳	(北星学園大学社会福祉学部准教授)
副代表	嶋田 佳広	(札幌学院大学法学部講師)
	川村 雅則	(北海学園大学経済学部講師)
事務局幹部	大滝 雅史	(北海道大学文学部)
	楠 高志	(市民ボランティア)
	今 加菜実	(北星学園大学社会福祉学部)
	須田 伸	(市民ボランティア)
	世良 迪夫	(北海道大学工学部)
	椎名 結実	(市民ボランティア)
	鶴岡 綾乃	(北海道大学法学部)
	中島 岳志	(北海道大学公共政策大学院准教授)
	中西 将人	(北海道大学法科大学院)
	成田 允子	(市民ボランティア)
	長谷川 喜哉	(北海道大学農学部)
眞鍋 千賀子	(市民ボランティア)	